

# 思い出としての個人史

中京大学心理学部 深津千賀子<sup>注1</sup>

## Autobiographical recollections

FUKATSU, Chikako (School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

### はじめに

本研究科完成記念の紀要特別号に教員も自己の研究の歴史と展望を寄稿することになった。展望するほど先は長くないので、自分がたどってきた道を簡単に振り返りながら、初心を忘れず、今後を考えるための覚書きとしたい。

### 1. 精神分析との出会い

研究者としての私の起点は横浜国立大学の卒業論文にある。「出生順位と性格」と題した卒論を教育心理学研究に発表して以来40数年が経っていることにあらためて驚いている。これは一人っ子として育った自分自身への関心とともに、友人を見ていると兄弟の中で何番目に生まれ育つかで、長男には長男らしい、次男には次男らしい性格があるように思えて調査研究を行ったものである。このテーマの選択の仕方に現れているように、私自身はごく思春期的な個人的関心から心理学を専攻しており、研究者としての自覚はなかった。

心理学科に入学した当初は講義を聴いても、私が求め、納得のできる心理学に出会えず、悶々としていた。今でこそ精神分析や臨床心理学関係の書籍は非常に多いが、当時は専門書もほとんどなかった。(もっともロジャース選集が出版されていたことは、3年になってゼミで知ったので、私の探し方の未熟さがあったことも確かである。) そのような中、たまたま1年の春休みに、岩波新書で宮城音弥氏の「精神分析入門」「夢」を手にして非常に心ひかれた。続いてそこに紹介されていたS.フロイト(S. Freud)の著作「文学と精神分析」を読んだときには本当に心躍る体験であった。これはS.フロイト

がV.イェンゼンの小説「グラディヴァ」の主人公ハーノルトの夢と著者イェンゼン自身について分析したものである。一見ばらばらに見えて意味のない人間の行動や出来事が、その人間の「無意識」を明らかにしていくことにより背景が見え、そこでは筋の通った、一貫した行動や出来事としての意味を統合的に理解することができる。この過程は、些細な事実を的確に観察し、その意味を裏づける証拠を集めるという地道な捜査の積み重ねから、問題の全体像を明らかにできて事件を解決に導く、名探偵シャーロック・ホームズの手腕の鮮やかさを読んでいるようで、ある種の知的な快感を味わうことができた。そのような興奮の中で、当時翻訳されていたS.フロイトの著作「精神分析入門」「夢判断」と立て続けに読んだ。1960年3月、6月、7月と購入した日付を書いたこれらの文庫本はセピア色になって、今も書棚に大切に残してある。当時の私が精神分析を本当に理解していたとはいえないのだが、少なくとも自分の体験に近いところで、人間の心について実感ももちながら考えたり、理解する手がかりを得て、私の世界は開けた。

### 2. 臨床に就いて

卒業後、たまたま先輩の紹介で慶應義塾大学医学部精神神経科に助手として入局した。フロイトは個人が心から望んでいる事は、必ず実現するものであるという意味のことを言っているが、今になってみると当時の私はそこが日本の精神分析の中心であることを知らないままに、精神分析の勉強ができるもっとも適切な環境を選んでいたのである。

もっとも、私が知らなかっただけでなく、当時は古澤頼雄先生のお父様である古澤平作先生がフロイトのもとから帰国して「精神分析研究会」を主催され、1955年に「日本精神分析学会」を創設してほ

注1 cfukatsu@chukyo-u.ac.jp

ば10年余、第I世代といわれる土居健郎先生、西園昌久先生、そして私の恩師の故小此木啓吾先生たちが精神分析学を日本に根付かせようと努力をしている真最中で、いわば日本の精神分析学そのものもまだまだ発展途上にあつたといえよう。

当時の慶應では三浦岱栄教授のもと薬理、病理、脳波などいろいろな研究室が医学部の卒後教育を行っており、大学病院での臨床実践のかたわら、精神科のフレッシュマンと一緒にサイコロジストも精神医学教育を受けていた。その一環としての心理研究室の教育は小此木先生と馬場禮子先生が力動精神医学や投影法解釈などについて、より長期にわたって、積極的なカリキュラムを組んで講義とスーパーヴィジョンを行う体制を作っていた。もちろん臨床講義や病棟のケースカンファレンスもあり、臨床に即した教育が充実していた。(因みに、八尋先生も慶應に勉強に来ておられて、この頃初めて出会った。)

そのとき学んだ「常態心理にも病態心理にも一貫した連続性をもってはたらく心理過程を仮定して現象を理解する」という精神力動的観点は、私のその後の心理臨床の基本的な視点となった。すなわち、個人の心理過程は出生以来一貫した連続性をもって働き続け、それは心と身体という内的ホメオステシスを保つ側面と、個体の環境、社会への適応という外的適応の側面をもっており、そこにきわめて力動的な心の働きがあつて、これがその個人を特徴づけていると考える立場である。精神的な症状であれ問題行動であれ、それは個体の均衡を保つための妥協形成として現れた結果である。当然、個人の心理検査場面での言動は心理療法場面にも通じ、常態と病態化した側面にもその個人としての連続性がある。心理検査はいわば特定の状況下でその個人の病態化した側面と常態を短時間で観察することができる臨床的な道具である。この精神力動的視点から心理検査、特にロールシャッハなど投影法を解釈した所見は、医療領域でサイコロジストが他の職種の専門家に臨床的に必要な情報を提供する上で非常に役に立つ。

当時は新人のための研修のほかに、心理研究室では心理検査の研究会、精神療法の研究会もあり、抄読したり、事例検討会では心理検査と精神療法の過程を照合したり、研究室全体で一つの研究プロジェクトに取り組んだり、臨床と研究が結びついた活発な活動を行っていた。

そのような中で、私自身は大学病院を中心として週

2日の出張先の精神病院や、後には企業の健康管理センター、開業の精神療法クリニックなどで臨床経験と研究を積み重ねてきたので3つのテーマに沿って振り返ってみたい。

### 3. 研究テーマ

#### ① 心理検査について

臨床に就いて、心理検査に関する研究を論文にしている。特に投影法としてのロールシャッハテストとSCTのバッテリーが被検者の病態水準、内的葛藤や自我の防衛、適応の水準、対人関係などの情報が比較的短時間で得られることから、1960年代は比較家族研究や家族関係認知について、研究室で行っていた研究を共同発表をした。

その他に精神医学的臨床所見との対応から見た投影法や心理療法における精神内界の変化など精神医学領域で心理検査の果たす役割、その実際について論文にした。

1970年代後半からは他科との共同研究が増え、泌尿器科医と「慢性前立腺炎」の研究、1980年代には産婦人科医と「妊婦の不安」に関する研究を行った。これらはロールシャッハほど深層心理を問題にするより、SCTや質問紙法(CMIやMAS, STAIなど)を使用し、それぞれに臨床的な成果をあげた。一方ではヒステリーや強迫神経症の事例についての心理検査と心理療法との照合を積み重ねていたが、この頃から精神科領域では境界例が研究テーマになり、「投影法と境界例」なども論文にした。

また、森田療法と精神分析的な精神療法との比較研究のチームで心理検査を担当した。まったくアプローチの異なる精神科医とグループで討論したことは、セラピストとしても興味深い研究であった。

このような心理検査と臨床像あるいは心理療法との照合は心理検査、特に投影法が知覚・記憶・認識を通して人間の心の働きのどのような側面を映し出しているのか、ということを考える上で大切で、もちろん現在も、臨床的に関心のある重要なテーマである。

#### ② 心理療法について

医療領域で心理臨床家として仕事をし、心理療法を担当すると多くは医師からの紹介で事例と出会う。そして、紹介する側も患者さんが良くなった成果を見て「あのセラピストはこういう事例が得意そうだ」

となると次からは似たような事例を依頼されることが多い。その意味で1980年代からは私宛に精神科外来を受診した、育児不安を訴えたり、子どもを虐待してしまう母親の事例の心理療法依頼が増えた。初めて担当したのは1歳に満たない赤ちゃんの両足を持ってソファにたたきつけてチアノーゼ状態にさせた母親で、驚いた夫が保健士に相談して乳児院に子どもを預けて受診した事例であった。重症の境界例の母親であったが、はじめは手探りで行った心理療法の効果が上がり、何とか引き取って自分で育てられるようになった。

その後、このような母親の心理療法の依頼が増えた。この経験を積んでいく内に、同じような問題をもっていてもその母親の人格の病態がちがうことが明らかになった。つまり、もともと人格障害があった女性が結婚し、妊娠出産してその状況に適応できなくて問題を表した場合もあれば、母親になるまでは問題が顕在化していなかったのに子育てに接して問題が生じてしまった場合、育児についての不安感のごく神経症で、夫など周囲のサポートが得られれば良くなる場合などもある。従って、母親の病態水準や環境の問題をはじめの段階できちんとアセスメントをすることが重要であることをあらためて実感した。

この過程で興味深かったのは、結婚前から過食・嘔吐など病理が前景に出ている女性は境界例としての特徴が明らかだが、むしろ母親になってから問題が顕在化する女性は、結婚前の職場などではおとなしうだが不適応があまり目立たないで済んでいたという、いわゆるシゾイド人格の特徴をもっている女性であることが多いことに気がついた。この時期、私自身がD. W. ウイニコット (D. W. Winnicott) について勉強が進んだこともあり、他方では重症分裂病質性人格障害の男性の心理療法を担当をし、どちらの心理療法からも早期の母子相互関係の障害、そのパーソナリティ形成への影響について学ぶことができた。

### ③ IFEEL Pictures について

育児困難や児童虐待の親の心理療法を行っていくと、親になったときに個人が幼児期から体験してきたことを自分の子どもに対しても繰り返してしまうという世代間伝達があることを実感せざるを得ない。また、感情が高ぶると外界認知が歪んでしまうこともよく語られる。先にあげた虐待をする母親は、子

どもが泣くと腹が立ち、殴りながら子どもが悪魔に見えてしまうと語った。そこでは自分が母親としてだめだと思ふ罪悪感を子どもに投影し、まるで子どもが自分を責めているように感じ、悪魔に見えてますます恐怖感にかられて殴り続けるという悪循環にはまる瞬間がある。このような観察からは人生の初期の対象関係である母子の相互作用が重要であると実感した。

このようなことを考えていた時期に、世界乳幼児精神医学会に出席した小此木先生がコロラド大学のR. エムディ (R. Emde) と出会い、乳幼児の顔写真を見てどのような情緒を読み取るかという試みについて、日本でも研究しようという話になった。彼らが作成した I FEEL Pictures の研究で、I FEEL は Infant Facial Expression of Emotions from Looking at Pictures の略と I feel (私は感じる) の掛け言葉になっている。生後12ヶ月の子どもの顔写真30枚を見て、その表している情緒をどう読み取るかという被検者の反応から、情緒応答性を見ようとするものである。日本人の写真版を作成する時の苦労は懐かしい。心理検査としては未完成であるが、臨床場面で手軽に育児不安や虐待についてスクリーニングする道具として役に立つと考えている。現在はゼミ生であった長屋佐和子さんが研究を進展させてくれていることを大変うれしく思っている。

## おわりに

基本的に私は研究者として臨床に触れているというより、臨床を続けていると研究が必要であり、その折々に必然的に研究テーマが定まって、それをまとめたところがあるところが正直なところであるが、臨床家としてはこれでよいと思っている。

覚書として自分のために残しておきたい今後の課題がいくつかある、学会発表をしながら論文にしないものをまとめたし、心理療法の効果判定に関して心理療法の前後に心理検査をした事例から検討したい。また、主として保崎秀夫慶大名誉教授の要請で担当した精神鑑定の心理検査も、鑑定の段階ではまったく別個に判定しているので精神医学的な所見と統合し、再検討してみたい。

さらに、現在、院生の学外実習で養護施設の子どものための遊戯療法を指導している。これは自分の研究ということではないが、子どもたちの率直な内面の表現がすばらしく、ぜひ院生たちにまとめて、そ

れぞれが自分の臨床の財産として残してほしいと期待している。

以上、これまでを振り返ってみるとその時期に応じた臨床の現実や私自身の状況が思い出される。現在も精神分析を学んだことが私自身の人生にとって役に立っているし、心理療法で患者さんから学んだことがたくさんある。臨床家にとって臨床の実践と研究は一生切り離すことはできないし、人間をそしてその心を対象としている限り、発見と興味がつきないと思っている。

#### 参考文献

- 馬場禮子・深津千賀子他 精神医学的臨床所見との対応から見た投影法テスト 臨床心理学の進歩 1968年版 1968
- 深津千賀子・馬場禮子 心理診断における情報の統合 臨床心理学の進歩 1967年版 1967
- 深津千賀子 精神分析的な心理療法における精神内界の変化の測定 ロールシャッハ研究 XI 1969
- 深津千賀子 産褥期精神障害の臨床—家族へのアプローチ 助産婦雑誌 Vol. 39, No. 9 1985
- 深津千賀子・中村留貴子 青春期女子ヒステリーの一症例—心理検査と精神療法の照合 ロールシャッハ研究 XXVII 1985
- 深津千賀子・中村留貴子 強迫症状（不潔恐怖）を主訴とした一例 ロールシャッハ研究 Vol. 30 1988
- 深津千賀子 投影法と境界例 季刊精神療法 1989
- 深津千賀子 子育てに困難をきたしている母親の精神療法 精神療法 Vol. 18, No. 6 1992
- 深津千賀子・小此木啓吾・濱田庸子 育児困難を訴える母親の診断と治療 精神分析研究 Vol. 36, No. 5 1993
- 深津千賀子 分裂病質性人格障害の精神分析的な心理療法 臨床心理学大系 19 人格障害の心理臨床 2000
- 深津千賀子 母性再考—育児困難・児童虐待の母親の精神療法経験から— 精神分析研究 Vol. 47, No. 1 2003
- 井上カーレン果子・濱田庸子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾 乳児の顔写真から情緒を認知する能力の測定—Japanese I Feel Picture Test— 家族療法研究 Vol. 7, No. 2 1992
- 北西憲二・皆川邦直・三宅由子・深津千賀子他 森田療法と精神分析的な精神療法の比較研究—第1報 精神療法比較研究の方法論— 精神科治療学 Vol. 5, No. 2 1990
- 北西憲二・皆川邦直・三宅由子・深津千賀子他 森田療法と精神分析的な精神療法の比較研究—第2報 治療対象の比較検討— 精神科治療学 Vol. 5, No. 3 1990
- 持丸文雄・深津千賀子 妊婦の不安に対する家族構成の影響 母性衛生 Vol. 24, No. 3・4 1983
- 持丸文雄・印出秀二・深津千賀子 妊婦の不安 周産期医学 Vol. 16, No. 8 1986

- 南坊満里子・深津千賀子他 投影法テストによる比較家族研究 臨床心理学の進歩 1966年版 1966
- 小此木啓吾・馬場禮子・深津千賀子 一般心理検査による家族診断—主としてTAT, SCTによる家族認知の診断 講座 家族精神医学 4 弘文堂 1981
- 小此木啓吾・深津千賀子 精神神経学的にみた職業性頸肩腕障害 災害医学 Vol. 17, No. 6 1974
- 小此木啓吾・衣笠隆幸・深津千賀子他 慢性前立腺炎の心身医学的研究 心身医学 Vol. 19, No. 5 1979
- 依田明・深津千賀子 出生順位と性格 教育心理学研究 Vol. XI, No. 4 1963

注：参考文献として挙げないが、S.フロイトの著作集は中山書店から出版されている。ここでは覚書として私が本論で触れた研究についての論文を挙げた。